

# 化学物質管理

Chemical Substances Management

製薬業界は、人の健康を守る医薬品を研究開発し生産するために、多種類の化学物質を使用しています。これらの化学物質が環境中に排出された場合、人の健康や生態系に影響を及ぼす可能性が疑われるものもあります。したがって、このような化学物質の環境中への排出をできる

だけ減らすことが製薬業界として重要と考えています。そのために、自主的な化学物質の管理の促進が有効と考え積極的に推進しています。

## 製薬協では

1997年度から自主的なPRTR調査活動を開始し、取り扱いまたは製造する化学物質について、環境への排出量・移動量を調査し、その結果を1999年から本報告書に記載しています。

また、有害大気汚染物質自主管理計画を策定し、有機塩素系化学物質の大気への排出量削減に取り組んでいます。

## 有害大気汚染物質自主管理計画



### 目標

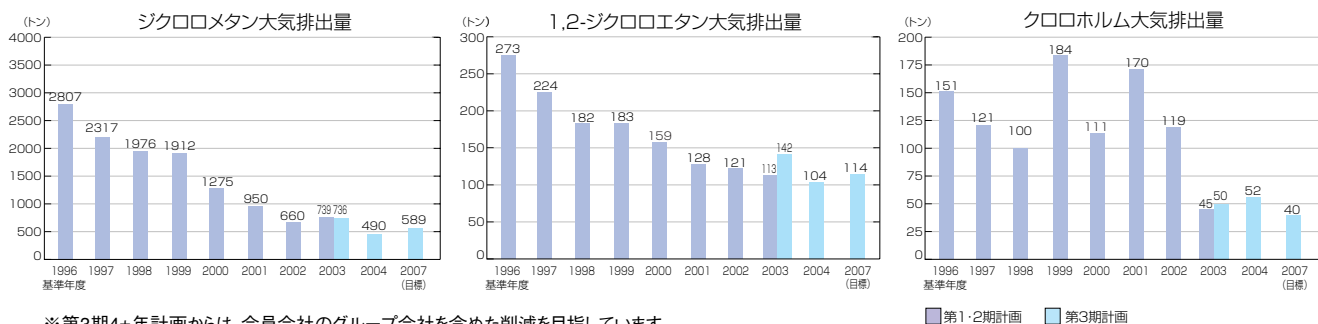
ジクロロメタン、1, 2-ジクロロエタン、クロロホルムの大気排出量を、2003年度の排出量を基準として、2007年度までにそれぞれ20%削減する。

製薬協では、ジクロロメタン、1, 2-ジクロロエタン等の有機塩素系化学物質については、排出量削減自主管理計画（第1期3ヵ年計画：1998年度～2000年度、第2期3ヵ年計画：2001年度～2003年度）を策定し、削減目標達成に向け取り組んできました。第2期計画は2004年3月末で、目標を大幅に達成し終了しました。

その他のホルムアルデヒド、ベンゼンについても、環境への排出抑制に努め、約50%以上の削減ができました。

ジクロロメタン、1, 2-ジクロロエタン、クロロホルムの大気排出量をさらに削減することを目標に、会員会社のグループ会社も含めた第3期4ヵ年計画（2004年度～2007年度）を策定しました。

	対象期間	対象物質	基準年度	排出量(トン)	削減目標	実績(トン)	削減率
第1期	1998年度～2000年度	ジクロロメタン	1995年度	2807	30%	1191.4	57.6%
		1,2-ジクロロエタン	1996年度	273	30%	155.6	57.0%
		クロロホルム	1996年度	150.9	30%	110.5	26.8%
第2期	2000年度～2003年度	ジクロロメタン	1995年度	2807	60%	739	74%
		1,2-ジクロロエタン	1996年度	273	50%	113	59%
		クロロホルム	1996年度	150.9	30%	44.7	70%
		ホルムアルデヒド	1999年度	3.3	—	1.7	49%
		ベンゼン	1999年度	17	—	6.5	62%
		テトラクロロエチレン	1999年度	2.3	—	0.7	69%
		アクリロニトリル	1999年度	0.07	—	0	100%
第3期	2004年度～2007年度	ジクロロメタン	2003年度	736	20%		
		1,2-ジクロロエタン	2003年度	143	20%		
		クロロホルム	2003年度	50.2	20%		

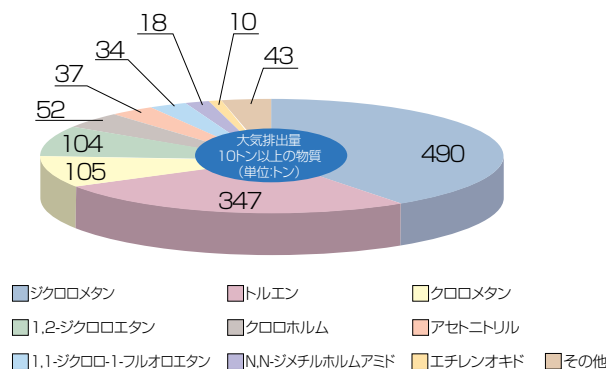


※第3期4ヵ年計画からは、会員会社のグループ会社を含めた削減を目指しています。  
 第3期計画の基準になる2003年度実績については、対象事業所数が第2期計画から増加しています。

## PRTR調査

2005年度調査※は、引き続き第1種指定化学物質354物質について調査しました。調査参加企業76社における年間取扱量(ダイオキシン類を除く)は、24,478トン、大気への排出は1,240トン、水域への排出は43トンでした。土壌への排出はありませんでした。大気への排出の多い物質は、ジクロロメタン、トルエン、クロロメタン、1, 2-ジクロロエタンの4物質で100トンを超え、次いでクロロホルム、アセトニトリルの順でした。

ジクロロメタンの大気排出量は34%削減、1, 2-ジクロロエタンについては28%削減できました。クロロホルムにつきましては4.5%増加となりました(いずれも2003年度実績比)。



※調査対象:製薬協会会員会社76社、回答76社  
 (子会社等、関係会社を含む256事業所)

## リスクコミュニケーション・リスクアセスメント研究会

2002年度から隔月に開催し2005年9月現在で11社が参加しています。2004年度、2005年度上期は合計9回の会合で以下の活動を行いました。

### 1) リスクコミュニケーションに関して

- ① 「土壌汚染が発見された場合の企業の対処手順」に関する講演会
- ② 土壌汚染およびPRTR対応Q&A集を完成
- ③ 参加企業による事例発表会
- ④ 「化学物質のリスク管理に向けたリスクコミュニケーションに関するOECDガイダンス文書」の輪読

### 2) リスクアセスメントに関して

- ① 大気拡散モデルの最新バージョン「METI-LIS (Ver.2.01)」を用いたシミュレーションの実施

2005年度下期はシミュレーション結果も用いたリスクコミュニケーションのロールプレイなども行う予定です。